
とある能力者の風紀活動

ミイティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある能力者の風紀活動

【NZコード】

N43370

【作者名】

ミイティ

【あらすじ】

超能力というものが当たり前になつた現代。

超能力者は人類の大半を占めた頃だ。

超能力は人類に新たな灯をともすとともに、新たな灯は凍てつく氷ともなる。

いくら科学によつて日本中至る所にセキュリティが張り巡らされていても、暴漢などを止めることはできない。

暴漢が増える一方で、それを止めるべく設立された通称「風紀委員ジャッジメント」

能力者（ヤングメンツ）の学生達による、治安維持機関だ。

風紀委員（フウキイニン）に所属するものたちが紡ぎだす物語が今、始まろうとしている。

多少の設定をとあるの世界等から借りています。

入学式（前書き）

再び小説再開！

昔のやつに比べて、周りの描写が大分上手くなつたかな？
応援よろしく御願いします

入学式

超能力といつもののが当たり前になつた現代。

超能力者は人類の大半を占めた頃だ。

超能力は人類に新たな灯をともすとともに、新たな灯は凍てつく氷ともなる。

いくら科学によつて日本中至る所にセキュリティが張り巡らされていても、暴漢などを止めることはできない。

暴漢が増える一方で、それを止めるべく設立された通称「風紀委員」。

能力者の学生達による、治安維持機関だ。

風紀委員ジャッジメントに所属するものたちが紡ぎだす物語が今、始まつとしている。

「新入生のみなさん、入学おめでとうございます。ならびに保護者のみなさま、誠におめでとうございます。謹んでお祝い申し上げます。

私はこの高校の卒業生で、五十一期生の境と申します。

高校受験という人生の難関を乗り越え、飛鳥高等学校の生徒となつたみなさんあらためてお祝い申し上げます。

義務教育を終え、自分の力で人生の進路を決めたのは初めてという人も多いのではないでしょうか。

みなさんが飛鳥高等学校で、充実した三年間を過ごせるように祈つております。

年々、飛鳥高等学校の知名度は上がり、今や県下有数の進学校に名を連ねるまでになりました。

しかし飛鳥高等学校のよさは、その進学率の高さだけではあります。

生徒を信頼し、その自主性に任せた当校の教育方針は、他校にはな

い実に特徴的なものです。

大いに学び、遊び、スポーツに汗を流せるような環境が用意されていますが、それらを学校側が生徒に強制することはありません。飛鳥高等学校はみなさんの積極性や自主性を大切にしています。つまり、自分の受ける授業を自分で選択することができるのです。また、数々の学校行事も生徒みずからの中手で運営します。文化祭や体育祭はもちろん、修学旅行や遠足、夏季合宿も生徒が主体となり、先生はサポート役になります。

例えば、修学旅行は行き先から旅行計画までが生徒に委ねられます。こうした教育を通して、物事を自分の頭で考えることの大切さを学んだ気がします。これは社会に出てからも大いに役立つております。みなさんにも、この自由な校風の中で、のびのびとした高校生活を送っていただきたいと思います

卒業生と言つ20代前半らしき人が演台で長い入学式の挨拶を終えると、保護者や先生方から拍手が巻き起こつた。

「さて、次は校長先生の挨拶です」

教頭が校長にそう促すと、校長は広い体育館にポツンと置かれた教卓の後ろに立つた。

「えへ、この度は」

校長先生の挨拶が終わり、閉会式が終わると新入生は順番に教室へと戻つていった。

入学式（後書き）

なんか1話はつまらないですね(汗)
演説みたいなのばかりだ。orz

先生

「改めて、先生の自己紹介をします。先生の名前は「そこまで言つと、先生は黒板の方を向き、黒板に掌をつけた。すると、黒板からはかすかにだが、白線の文字のようなものが現れた。

それは次第にこぐなり、やがてチョークと変わらぬほどのこぐさとなる。

黒板には、光月 茜といふ文字が浮かびあがつた。

「光月 茜とります。1・3の担任になりましたので、宜しくお願いします」

外見通り口調も柔らかく、性格も優しそうだ。

「さつそくですが電子教科書をクラスの人数分取りに行くのに手伝ってくれる人はいませんか?」

そう言ったとたん、男子達が我先にと手を上げた。

「じゃあ……あなたとあなたとあなた。それとあなたとあなたね」先生はまだ名前を知らないため、指差しで連れて行く人を決めた。指を指された男子達は、誇らしく胸をはつて先生についていった。

親友

先生が帰つてくると、男子達の手にはアイパッドにそっくりのものがあつた。

そして男子達が前列にアイパッドのよつなものを配る。

それを前列の人達は後ろに回した。

全員にアイパッドのよつなものが行き渡つた。

「これはアイパッドを改良し、教育用に作られた（Electroni c Textbook）です。一般には、（ET）と呼ばれています。電池もいらないので、地球環境にも優しいのです。3年間使っていくので大事にしてくださいね。使い方は中学校や小学校高学年の時に習いましたね？」

「はーー！」

男子達は、大きくて元気な返事をした。

「」の学校では、先ほどの卒業生が言つた通り、自分が受ける授業を選択できます。

一日授業をするか、一日体育をするか、一日何もしないか。それは全てあなたの自由です。さて、時間になつたので今日は帰りましょう

そう言つと皆は席を立ち、カバンを持つて教室から出で、各自帰宅しようとしていた。

彼女も薄っぺらの茶色いカバンを持ち、教室を出た。
「天音^{あまね}！」

誰かが私の名前を呼んだと思つて後ろを振り向くと、そこにはメロン色のリラックスロングを揺らして近づいてくる親友の荒城瞬姫^{あらしきじゅんき}姫がいた。

「一緒に行こ～！」

走ってきた勢いを殺しながら歩きへと変え、風紀委員専用教室へと向かつた。

ジャッジメント

「新しい風紀委員の教室、楽しみですの」

期待を胸に抱きながら、1年生のクラスと同じ階にある北校舎一階の端の風紀委員専用教室（1年専用）に入った。

風紀委員

「**風紀委員**専用教室の大きさは、教室と同等だ。**基盤**は教室と同じようで、黒板も存在する。

置いてあるものといえば、教室にある机を少し大きくしたものに、その上にあるノートパソコン。

後はプロジェクター等、様々なものがある。

黒板に貼り出された紙を見て、指定されている席に座った。6列あるうちの左から2列目で一番前の席だった。

瞬姫は天音の左下で、会話がしやすい。

高校生になつて初めての**風紀委員**活動なので、普段とは違い、先生に説明を受けなければならない。

後ろの席に既に同じ1年が数名いて、お喋りを満喫していた。

私達が教室に入ったのを機に、他の学級も終わつたらしくどんどん椅子は埋まつていった。

そして、最後にガラリという音を立てて入ってきた。いかにも体育会系っぽい先生だ。

先生は教卓の前にいくと、生徒達を舐め回すように一人一人の眼を見ていつた。

全ての生徒を見渡すと、ようやく口を開いた。

「**風紀委員**一年を指導することになった。**和立** わだち **志郎** じろうだ」

声も顔と同じくゴツかった。

「**風紀委員**の活動内容を知つていると思うが、一度言つぞ」

教卓の引き出しにある人数分のプリントを前列に配り、後列へ回させた。

「**風紀委員**は、能力者の学生たちによる治安維持機関だ。その他にも超能力者が関連していると思われる犯罪の対処、大きな災害や事故での救助等もする。自分が大事なやつはとつと抜けることだな。大体お前らみたいなガキに治安維持を任せるのはどうかと思うがな。

逆に治安を悪くするんじゃねえか？」

最後の生徒を貶^けなすような言葉に、怒りを露^{あらわ}にしているものもいた。

「各自小屋^{いえ}に帰つてプリントを呼んで置け」

そういう残すと先生が教室から出て行くと、教室の緊張感は一気に緩み、先生に対する暴言^{あざけい}が飛び交つた。

天音は、暴言^{あざけい}が充満している教室から薄^{うす}っぺらの茶色い手提げカバンを持って抜け出した。

その後には、瞬姫もつこってきた。

「途中まで一緒に帰^かるよー！」

「よろしいですの」

二人は騒^{さわ}がしい教室を後に、コソコソといつ廊下に歩く音を響かせて靴箱へと向かつた

風紀委員（後書き）

こんな先生がいたら即クビですかね？

お仕事

翌日

「明日は土曜日なので学校は休みです。明々後日から本格的な授業が始まるので、楽しみにしてくださいね」

一通りの学校見学及び説明、先生の紹介、生徒達の自己紹介等の授業が終わり、^{ジャッジメント}風紀委員の教室へと向かった。

もちろん、瞬姫を連れて。

「またあの先生くるのかなあ……？」

瞬姫は、不安そうな表情を浮かべていた。

温厚といえるかどうかは分からないが、あまり悪口をいわない瞬姫が人を嫌悪するのは珍しい。

ということは、やはりあの先生はかなりの人達から嫌われているのだろう。

「風紀委員はほぼ自主活動ですし、あの先生がくるのは時々だけですの」

風紀委員教室の扉をガラリと開けると、中は重たい空気だった。

私と瞬姫は指定された席に座り、薄っぺらの茶色い手提げカバンを机の隣の出っ張った所に引っ掛け、中からE.Tを取り出した。

E.Tは先生や生徒とオンラインで繋がっているため、明日はどの教室が開くか、どの教室でどのようなことをするか等が分かる。学校の生徒や先生とも、メールや通話ができる。

画面を指でタッチし、明日の開く教室を確認した。

（移動系能力者専用の教室が開いてますわね……）

再び画面をタッチし、移動能力者専用教室で明日何の授業があるかを確認した。

（明日は移動系能力者でも、私の瞬間移動のように点と点を移動するものと、直線的に移動するものに分かれるようですわね）

授業内容を確認した後E.Tをカバンにしまい、風紀委員の仕事をす

テレポート

ジャッジメント

ジャッジメント

るべくPCを起動した。

一瞬にして真っ暗だつたPCは明るくなり、アイコンがズラリと現れた。

そして、昨日のプリントに書かれてあった（パスワード設定）をし、盾マークの腕章アイコンをクリックした。

一つのウインドウが開くと、そこには超能力者が関係していると思われる未解決事件がズラリと現れた。

リアルタイムで事件が表示されているので、既に達成している依頼が残っているなんてことは起きない。

その中で、一際目立つように書かれた文字が目にに入った。

【緊急！ 立てこもり事件発生！】

名称の横にある マークは、その難しさをあらわしている。

塗りつぶされた マークが4つということは、危険度、及び難易度が高いということだ。

右には、地図が表示されていた。

それを見ると、正義感の強い天音は居ても立っても居られなくなり、その名称をダブルクリックし、右下にある受注をクリックした。

そして瞬姫を連れて風紀委員の教室から出ると、走つて靴箱へと向かつた。

靴を瞬間移動テレポートによって一瞬で履き替え、外へと飛び出した。

後ろから追つて来る瞬姫は、まだ依頼内容を聞いてないため、疑問に思つていた。

「ねえ天音！ 依頼内容つてなんなの？」

走つているせいか、言葉の高低差が少しおかしかつた。

「立てこもり事件ですの！ 第一に人質の確保、次に犯人の拘束です。時間がないので瞬間移動しますの！」

走る勢いを殺し、走るのをやめた。

天音は俯いて目を瞑り、しゃがんで集中している。瞬姫は、それを黙視していた。

「見つけましたわ！」

犯行現場を見つけ、顔を上げると”ヒュッ”という空を裂く音だけを残して天音と瞬姫はその場から消えた。

瞬間移動

「^{テレポート}スタッフ」
瞬間移動によつて犯行現場へと駆けつけた二人は、近くにいた刑事に詳しい話を聞いた。

「立てこもつている男は20代後半と思われます。警察が話しかけても顔を一切出さず、返事もしません。大変危険な状態です。拳銃を所持していて、かなりの腕前です」

「人質は？」

「人質は一人の女性です。男は肌身離さず拳銃と女性を持っています。強行突破したら人質がどうなるか……」

「分かつたわ。後は私が調べる」

そう言って、再び俯いて目を瞑り、しゃがんで集中した。
数？内の好きなところに視界を飛ばせることを応用して、一秒に數十点という高速であちこちに視点を飛ばし、瞬時に周囲の空間の様子を把握するのが天音のもう一つの超能力だ。今は立てこもっている廃墟ビルの中を見ているのだ。

「瞬姫！」

「はいよ！」

瞬姫は超能力の空氣支配能力によつて無数のカマイタチを発生させて木の枝を数本切断し、風によつて天音の手元に移動した。

「銃だらうがなんだらうが……私の前では意味がありませんわ！」

握っている木の枝を握り締め、“ヒュツ”という音をたてて瞬間移動させた。

これも天音の瞬間移動の特徴の一つ。

普通の瞬間移動能力者は肌に直接触れないといけないが、天音の場合は接触させていなくても、瞬間移動できるのだ。

とても自由度が高く、様々なことに使える。

木の枝の移動先は……男の持つている銃だ。

”ヒュッ”

瞬姫と天音は、瞬間移動テレポートによって畳み掛けるように移動した。

「そこまで！」

人質を自らの背後に瞬間移動テレポートさせた。

「表に警察がいます。そこに行ってください」

そう促すと、人質はコクリと頷いて階段を駆け下り、出口へと向かっていった。

トランプ

「な、なんだお前らは！」

男は驚き、こちらに銃を向けた。

「その銃は使用不可能ですの！」

男は引き金を力チカチと鳴らしているが、弾が発射されることはない。

天音の先ほどの瞬間移動によって、木の枝を拳銃の内部に転送し、内部から破壊したのだ。

これが天音の瞬間移動のもう一つの特徴。

飛ばした先に障害物がある場合重なった部分の物質を押しのけて割り込むように転移するため、飛ばしたものは双方の硬さに関係なく障害物に刺さつた状態で出現する。

「くつ……くそお！」

男は持っていた拳銃をなぜかズボンのポケットにしまい、交換するようになり畳み式ナイフを引き抜いた。

「近づ……」

「没収ですの！」

天音は瞬間移動によつて男のナイフを自分の右手に転移した。

ナイフを右手で包み込むと、男の汗がベツタリとついていた。

ナイフは折りたたんで、すばやくスカートのポケットへと閉まつた。

「瞬姫！ 制圧を！」

「出番だね！」

瞬姫は嬉しそうにして左手を前に突き出した。

とたんに、廃墟ビルは締め切つているというのに前方に暴風が吹き荒れた。

”ビュオオオオ”という物凄い音を立てながら、瞬姫はじりじりと男に迫つていく。

男はあまりの風の強さに、身動きを取れないでいた。

「諦めな！！」

左手を突き出したまま、じわじわと男に迫る。その距離およそ5m。

「危ないですわ！」

”ヒヨツ”

後もう少しという時、天音が瞬姫を近くに瞬間移動した。テレポーター

「何すん……」

”ガガガツ”

先ほど瞬姫がいた場所に、数本の矢が落ちていた。

「トラップ罠……」

「ちつ！」

男は、再びズボンに手を突っ込み、折り畳みナイフを取り出した。どうやら、数本入れているようだ。

「つおらー！」

男は掛け声とともに投げると、それは正確に天音の頭のど真ん中を狙っていた。

痛み

”ヒュツ”
瞬間移動^{テレポート}によつてナイフの体勢を水平から垂直へと変えた。

その時だ。

ナイフは有り得ない曲がりかたをして、再び天音の頭のど真ん中を狙つた。

「なつ！？」

”ヒュツ”という音を立てて天音は自分と瞬姫を後方へと瞬間移動^{テレポート}させた。

ナイフはまったく衰えを見せず、天音の頭のど真ん中を狙つていた。

「しつこいですの！」

今度はナイフそのものをビルを支える太い柱の中へと瞬間移動^{テレポート}させた。

「食らえ！」

ナイフを退け、安堵していたその時だ。

ナイフに気をとられ、男の動きをまったく見ていなかつたため、後方に男が移動しているのに気づかなかつた。

”ザシユツ”

静かな廃墟ビルに、人肉を引き裂く音が響いた。

痛みを堪えながら天音は男から素早く下がつた。

「俺の能力は狙つたものに必ず当たられるんだよ。永遠に逃れることはできねえ」

”ミシツ”

辺りに、構造材が割れる音が響いた。

有り得ない。このビルはコンクリートで建設されているため、木が乾燥して割れる音が響くことはない。

痛み（後書き）

“どうでもいいのか分からぬ……（予約分）

ESPロック

それを即座に異変と感じ取つた天音は、ナイフを転移した柱を見た。太いコンクリートの柱には亀裂が入つていて、亀裂の中心からはナイフの先端の鉄で突き出していた。

”バキッ”

完全にコンクリートから脱出すると、一目散に天音を目指して襲い掛かってきた。

”ヒュツ”

天音は瞬間移動テレポートを使い、ナイフを別の太い柱へと転移させた。

時間稼ぎにしかならないが、少しの間ナイフを封じ込めればいい。

「もつと増えるぜえ！！」

男はポケットからありつたけのナイフを取り出し、全てを同時に天音に向けて投げた。

コンクリートに埋まってるナイフもふくめ、その数6本。十分厄介な数だ。

「瞬姫！」

「分かつてるつて！」

瞬間移動テレポートでは時間稼ぎにしかならないので、瞬姫に力を借りることにした。

瞬姫は左手を前に突き出した。

今度は先ほどのような突風ではなく、圧縮された空気の蔓のようなものだつた。

空気の蔓はナイフを絡めとり、地面へ叩きつける。

空気の蔓はやがてナイフを封じ込める檻となつた。

「ナイフがない貴方に、何ができますの？」

天音は制服のスカートのポケットに手を入れ、中から風紀委員支給品の手錠を取り出した。

”ヒュツ”という音とともに手錠は一瞬にして男の手首に絡みつい

た。

「ESPロック!? これじゃあ超能力が使えねえ……」

ESPロックとは、超能力者を拘束する場合などで使用する、超能力の使用を阻害する手錠のことだ。

男は観念したように膝から地面へと崩れ落ちた。

瞬姫も空気の檻からナイフを取り出した。

相手が超能力を使えない以上、ナイフが一人を襲うことはない。

「貴方を警察に引き渡します」

そう告げ、男を引っ張りながらビルの外へと出て行った。

「これ。犯人が持っていたナイフですの」

天音が警察にナイフを渡すと、警官はコクリと頷いた。

男はそのままパトカーに入れられ、パトカーは署へと戻つていった。

「ふう、これで終わりだね」

「ですわね」

夏が秋へ移行しているため、一日一日の温度差が激しい。

今日は肌寒く、一刻もはやく風紀委員教室に帰りたいところだ。

「じゃ、学校に瞬間移動しますの」

”ヒュツ”という音とともに、一人は学校の屋上へと瞬間移動した。屋上なら人がいないからだ。転移先に人がいると、先ほども行ったとおり押しのけて出現するため、大惨事になつてしまつ。

だからあえて人がいない屋上を選んだという訳だ。

それから校庭に人がいないのを確認し、校庭に瞬間移動、そして靴箱に人がいないのを確認し、瞬間移動した。

靴と上履きを瞬間移動させて履き替えた。

そして風紀委員教室の扉を開けた。

中は、相変わらず重い空気が漂つていて、椅子にポツンポツンと間が開いていた。

恐らく、帰宅した人か事件に出ている人だろう。

一つの事件をこなして疲れた天音と瞬姫は、P Cの電源を切り、薄っぺらの茶色いカバンを持つて帰ることにした。

ガラリと扉を開けると、他の部活の人気が靴箱へと向かつていた。

もうそんな時間かと思い、カバンから携帯を取り出した。

天音の携帯は小さくて縦長の白い棒のようなものから、画面を引き出すという形になつていて

画面を引き出し、左上にある時計を確認すると、時刻は5時半になつていた。

天音は携帯をカバンに直し、靴箱へと向かつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4337o/>

とある能力者の風紀活動

2010年10月30日20時46分発行